

松前広長『夷酋列像附録』の歴史認識

菊池 勇夫

はじめに

蠣崎波響筆『夷酋列像』は、松前藩によるクナシリ・メナシのアイヌ蜂起の鎮圧にあたって、同藩に協力した主要なアイヌの人物一二名を描いた肖像画として知られている。当然ながら波響その人や、画風・技量、『夷酋列像』に描かれた象徴的な人物像と事物の解明、などといったことについて関心が向けられてきた。

この『夷酋列像』に序を書き、また列像人物の功労等を称揚した『夷酋列像附録』を著したのが松前広長である。波響は叔父にあたる広長の教育、薰陶を受けたと波響伝には必ず記される人であるが、広長のそうした文章は衝撃力のある『夷酋列像』の画像それ自体に比べれば、付属的で目立たず、それ自体が着目されることはあまりなかった。しかし、『夷酋列像』の成り立ちや背景を考えると、その序や『夷酋列像附録』による枠組みや意味づけを外すことはできない。両者を一体のものとして捉え、かつ両者の相克を読み取る視点が欠かせないように思われる。

松前広長（一七三七～一八〇一）は藩主邦広の子で藩の家老職を勤めたというだけでなく、藩主道広の命によって

『福山秘府』（安永九年・一七八〇脱稿）を編集し、また『松前志』（天明元年・一七八一序）などの自著があり、当時の松前藩を代表する碩学として正統的な歴史認識を担っていた人物である。『夷酋列像』の解説者としては松前藩の歴史に通暁する広長以外にはいないという存在であった。広長の事績については、『新撰北海道史』第五卷所収の『福山秘府』解題に少しく触れているのがよく参照されてきたといえようか。¹⁾ここでは、松前藩の藩儒であった新田千里が一八七八年（明治十一）に脱稿した『松前家記』から広長の説明を紹介しておこう。

小字ハ練五郎、長シテ監物ト称ス、母は前ニ同シ（土橋氏―菊池注）、宝暦五年家臣松前広行（平次右衛門ト称ス）ノ後ヲ承ク、天明八年八月致仕シ老圃ト号ス、享和元年五月十日没ス、年六十五、広長文学ニ長シ著シテ松前志、福山秘府等ノ数種アリ、本藩ノ事蹟ニ於テ大ニ綜覈スル所アリト云フ²⁾

小論では、史家・学者としての松前広長の事績を詳しく検討する違はないが、『夷酋列像附録』に凝集的に表現されている広長の帰属意識としての松前藩（松前氏）の歴史認識について読み解いてみようと思う。文献史学の側から、『夷酋列像』それ自体の歴史的評価に迫っていくための一つの試みとしたい。

一 『夷酋列像附録』の成り立ち

『夷酋列像』の原本は、函館市中央図書館（旧市立函館図書館）所蔵本とブザンソン市立図書館所蔵本の二組存在すると考えられている。模本もいくつかの所在が知られ、そのうち、小島貞喜筆の模写本（個人蔵）には、「夷酋列像序」、「夷酋列像附録」二種、「夷酋列像賛」（皆川淇園ほか）が含まれ、『夷酋列像』本来の全容が伝えられている。³⁾その資料影印が『波響論集』（波響論集刊行会、一九九一年）に全文掲載されているので、小論ではこれを使用して

いくこととする。⁽⁴⁾

「夷酋列像序」(漢文体)は『夷酋列像』の肖像画本体の序をなすもので、寛政二年十月の日付の下に「致仕老臣広長謹撰」と記され、「毛夷」の「壤辺」にあつて、「武備」を講じてきた松前藩の歴史について、藩祖清厳公による「夷賊」の「震服」(コシヤマインの戦い)や、寛文中の「夷賊」の「征討」(シヤクシャインの戦い)の事実をあげて、その文脈のなかで、寛文以来百有余年にして寛政元年夏東部で起こった「夷賊」の「征討」(クナシリ・メナシの戦い)を位置づけている。まさしく「夷賊」征討史観であるが、その歴史をやや詳しく述べたのが『夷酋列像附録』であった。ただ、この『夷酋列像附録』には、どちらも漢字交じりであるが、楷書体カタカナ本と草書体ひらがな本(いずれも冊子体)の二種があり、藩の歴史を書いているのは前者のカタカナ本のほうである。したがって、以下カタカナ本がもっぱら検討の対象となる。

カタカナ本の『夷酋列像附録』は「一名毛夷凶画国字附録」とも題され、東肥の古鬲、すなわち熊本藩儒の古屋昔陽の序がつけられている。本文はこれから検討する松前藩史を概述したあとに、「夷酋」の列像一人ひとりの「功」を記している。末尾には寛政二年十一月に、藩主松前道広の「君命」に応えて執筆したことが明記され、「臣源広長識于松前草部枕流隱館」と署名している。ひらがな本にはこうした署名がないから、このカタカナ本のほうがより公式な文章ということになるのか。藩の歴史を背負った「臣」としての責務を果たそうと、全力を傾倒して取り組んだという張りつめた緊張感のようなものが漂っている。『夷酋列像』の肖像画には「臣広年画之」とあり、こうした公務性こそが、『夷酋列像』や『夷酋列像附録』を第一義的に特質づけているとみななければならない。

二 「夷賊」征討の歴史

『夷酋列傳附録』（カタカナ本）は、まず「夫我毛夷ノ国」とする自己規定を示し、松前や福山という地名の由来に触れたあと、景行天皇代の日本武尊による辺郷を犯す「夷賊」の「征伐」によって「毛夷ノ我」が「日本」に属し、永く「日本王化」の「威徳」に従うこととなったとするところから説き始め、松前藩（松前家）の寛政アイヌ蜂起の鎮圧に至るまでの歴史が語られている。

その要点をまとめてみよう。「日本」に属したとはいえ、「毛夷」（「蝦夷」）の「叛服」には定まりがなく、足利時代の頃から「蝦夷」は大いに擾乱するようになった。ただ、奥羽の「境地」にまでは至らず、「境内」の要地に住む「武士」との間の「攻撃」（戦闘）にとどまった。この武士たちは我らが古の方俗にいうところの「渡党」の後胤である。「渡党」というのは源頼朝の奥州発向で藤原泰衡が滅亡したさい、逃げて蝦夷に潜居した士たちのことである。同年、源廷尉義公（義経）もまた「夷中」に入って「夷人」に敬尊され「神」（オキクルミ）と称されているといい、蝦夷に到ったという証拠はないものの、新井白石の『蝦夷志』や、清朝が撰した『凶書集成』中に源廷尉が韃靼に到ったと書いているとする伊勢人葛陂伯起子の語り、同じく清朝撰の『御製詩文集』序文に始祖源義経の章があるという説、太宰徳夫（太宰春台）の「鎌倉賦」、馬場氏（馬場信意）の『蝦夷勲功記』をあげて、しかも古今和俗に樵夫や牧童にいたるまで話していることからすれば、この説は捨てがたいとする。建保年中には右大臣実朝が「日本海賊ノ徒」を蝦夷に追放したが、これも渡党に等しい者たちであった。

こうして建久より長祿にかけて二六〇年の間に「渡党」の子孫たちが次第に「渡り島」の「蝦夷」を追い退けて所

々に「果溝」(館)を築いていくことになる。松前藩の始祖武田清巖公(信広)が享徳三年(一四五四)に若狭より来たが、おりしも長祿元年(一四五七)東北西の「蝦夷」が「蜂起」して、「館主」が攻め落とされ窮地に陥った。その時清巖公が「絶倫ノ英風」をふるって「夷賊ノ酋長」^{コシヤマイ}胡奢魔允父子を討ち、それに諸館主も敬服し、推されて「太守」となった。そして永く「北門の鎖鑰」として「日本」が「東顧ノ憂ヒ」がなくなったのは、まったく始祖の「勇武」のおかげである。

その後、永正八年(一五一二)「東部夷乱」、大永中(一五二一〜一五二八)「東西夷賊蜂起」、寛永二十年(一六四三)「西部夷人騒動」、承応二年(一六五三)「東部夷賊蜂起」、寛文九年(一六六九)「東部夷賊反ス」などといった蜂起をことごとく討ち、平定してきた。そこから一二一年を経て、この東部北島クナシリ「夷賊警動」の事態が発生した。君公(藩主道広)自らが先鋒の勇士強卒一六〇人余を扨び、節刀を授けて福山城を進発させた。そしてノツカマフに到着し、徒党の「夷賊」を投降させ、賊首三七級を携え、「夷人」四三人を伴い凱旋することになる。拝謁した「夷人」たちはその功によりそれぞれ賞された。およそこのような藩の「夷賊」鎮庄の歴史であった。

三 「毛夷国」観と「渡党」認識

ここに述べられた松前藩の歴史認識のなかで特徴的なことは、自らを「我毛夷ノ国」「毛夷ノ我」「我蝦夷」と認識していることである。それは主著『松前志』でも同じで、自序に「毛人国松前撰於采邑」と記し、また「城地説」に「夫れ我が毛夷の国たる、土地山海を兼て、南は則ち諸州壳船の輻湊するところ、北は則ち北狄の大鎮にして、地曠く山險し。実に日本北門の真鑰、永世の藩鎮たり」と、述べている。ここにいう「北狄」は「毛人国」の外側にひろ

がる北方世界をさしているが、内には「夷人」「夷賊」を抱え、外には「北狄」に相対しているのが「毛人国」であるという認識なのであろう。「毛人国」とほぼ同義の「国号」として「日高見」「蝦夷国」をあげ、城下の総名や、氏号となっている「松前」も国号のようにしているとす⁷⁾。

松前藩は幕藩制国家的には主として蝦夷地に対する夷狄の押えを担う「日本」の大名権力であって、蝦夷島が松前地（日本地、和人地）と蝦夷地とに区分され、蝦夷松前から奥州松前へと変容していく近世的展開のなかでみれば、松前藩ないし松前は「毛人国」あるいは「蝦夷」とはいいがたく、「日本」の松前藩が「蝦夷」に對外的に向き合っている関係になるのであるが、『福山秘府』の編纂に関わって松前藩とは何かと自問していくなかで、また「北狄」世界のひろがりを意識するなかで、松前藩の藩祖以来の「毛夷国」の統治者としての歴史の特性が自覚・再認識され、我がアイデンティティとしての「毛夷国」観が前面に押し出されてきているのだといえよう。クナシリ・メナシの戦いに遭遇して、ますますそうした「毛夷国」観が強調されることとなったが、しかしながら松前氏は「毛夷」ないし「蝦夷」そのものの系譜であると広長が自己認識していたかといえ、それは違うと言わざるをえない。

そうしたアンビバレントな自己認識を読み解く鍵が「渡党」である。コンシャミンの戦いにさらされ劣勢の「渡党」にとって救世主のごとく登場してきて、「夷賊」を退け、「渡党」のいわば盟主の地位に押し上げられることになったのが藩祖武田信広であった。「渡党」認識は『福山秘府』の引用書目中にあげられている『新羅記録』に拠るものとい⁸⁾ってよい。『新羅記録』は『新羅記』、『新羅之記録』とも書かれ、松前景広が編纂し正保三年（一六四六）に成った松前家代々の歴史書（漢文体）であるが、「渡党」については次のように記していた。

抑も往古は、此国、上二十日程、下二十日程、松前以東はひかわ隅川西は與依地よい迄人間住する事、右大将頼朝卿進発し

て奥州の泰衝を追討し御たまひし節、糠部津輕より人多く此国に逃げ渡って居住す。(中略)今奥狄の地に彼の末孫狄と為りて之に在りと云云。亦実朝將軍之代強盜海賊の従類數十人搦め捕り、奥州外之浜に下し遣り、狄の島に追放せらる。渡党と云ふは渠等が末なり。亦其以後嘉吉三年の冬下国安東太盛季小泊の柴館を落され渡海の後、跡を慕ひて数(多)の人來住し、今に於て其末孫の侍共之に在るなり…。(8)

渡党というのは、「狄の島」(蝦夷が島)へ鎌倉の源頼朝の平泉攻めによって逃亡してきた人々の子孫、あるいは鎌倉將軍実朝によって追放された人々の子孫を指すとし、そして津輕安東氏の没落・渡海や松前氏の始祖の渡海が語られることになる。こうした記述に拠って、『福山秘府』では、鎌倉將軍実朝が強盜海賊の徒を蝦夷島に追放したが、これがすなわち渡党であるとし、『東鑑』中にも建保四年(一二一六)夏の追放記事を見出し、館主はこうした徒の後胤であろうかと注釈をしていた。

また、『松前志』にも、「古方俗」にいういわゆる渡党は館主のことで、その人々には小林太郎左衛門良景、河野加賀政道、佐藤三郎左衛門季則、南条治部季継、薦槌甲斐季直、今泉刑部季友、下国山城定季、相原周防政胤、近藤四郎左衛門季常、岡部太郎左衛門季澄、厚谷右近重政、茂別八郎、式部家政、蠣崎修理季繁などがいるとし、詳しくは旧記中に見えると記していた。旧記とは『新羅之記録』に他ならないが、そうした渡党観が揺らぐことなく『夷酋列像附録』に受け継がれていた。

したがって、本州からのいくたびかの松前渡海の動きによって「渡党」が形成され、その統一者として松前藩祖が位置づけられるとき、蠣崎・松前氏は日本(本州)からの渡来者であって、元来の居住者としての「毛夷」「蝦夷」ではないことは明らかである。「我毛夷」とはいっても、「毛夷」の征服者、統治者としての自己主張なのであった。

渡党という呼称であるが、広長自身は知らない詞書であったろうが、室町時代初期の諏訪円忠『諏訪大明神絵詞』(延文元年・一三五六作成)に出てくる。「蝦夷カ千島」には「日ノ本」「唐子」「渡党」という三類の人々があり、このうち「日ノ本」「唐子」の二類は「外国」に連なっていて「形体夜叉ノ如ク」であって「変化無窮」であるが、「渡党」は津軽外ノ浜と往来交易し、言語(言葉)は「俚野」であるが大半は通じ、「和国ノ人」に類していると書かれている。その点だけみれば、『新羅之記録』や広長の認識と変わりはないが、同時に木幣や毒矢などアイヌ文化的要素を内在化させている人々でもあって、混濁的な境界人としてのすがたをみせていた。⁹⁾ 渡党と交易する津軽・外ノ浜の人々も、そこはもともと蝦夷の地であったから、日本人(和人)化への傾斜をみせながら、「渡党」の生活様式とたいして違っていなかったとみるべきかもしれない。それが渡党の実態であったとすれば、近世の『新羅之記録』や広長の日本人的「渡党」との間に少なからずギャップがあり、室町・戦国期に「渡党」から「蝦夷」的なものの疎外・排除が進行したということの意味していよう。

四 義経蝦夷渡り説の採取

『夷酋列傳附録』の「渡党」の歴史に語られて、『新羅之記録』に出てこないのが義経蝦夷渡りの伝説(物語)である。新井白石の『蝦夷志』(享保五年・一七二〇自序)は西部地名の「弁慶崎」が義経蝦夷渡り説を証左するものとして有名にした。さらに廷尉が北海を踰へたとし、寛永年間に韃靼に漂流した越前国人が帰還して、奴児干部の門戸の神は廷尉像の画に似ていると話したことを記して、義経の蝦夷渡海、韃靼渡海説の流布に大きな影響力をもった。¹⁰⁾ 馬場信意『蝦夷勲功記』(正徳二年・一七二二)は、義経Ⅱオキクルミ説や、シャクシャインⅡ義経末裔説などを語

り、蝦夷渡りの物語（創作）のある到達点を示し、よく知られた作品であった。¹¹⁾

広長はこうした『新羅之記録』が書かれた時代には存在していなかった義経蝦夷渡り説に飛びつき積極的に取り入れたということになる。『松前志』にも、「オキクルミとは源廷尉義経を尊信して、其古を物語とせるよし。義経異国へわたれる由往々符合のことあれば其説尤信じへし」とし、弁慶崎をその証とする白石翁の説や、近頃の徂徠翁の高弟春台翁の文集中に「範帰死乎都門、経走竄于蝦夷（経走りて蝦夷にのがる）」の文を見つけて記していた¹²⁾。さらに『松前志』の執筆後になろうか、清朝撰の『図書集成』あるいは『御製詩文集』にみられるという清の始祖義経説に接して、『夷酋列像附録』に記すほどであった。

『図書集成』というのは、伊勢貞丈著『安斎随筆』によれば、一万巻の清朝康熙帝の自撰になる書物で、全備本が宝暦十四年（一七六四）日本にもたらされ「官庫」に納められたが、ある説に清朝の姓は清といい、源義経の裔で、清和天皇の清の字を取って国号としたと、康熙帝の自序に書かれているとするが、それはまったくの「大偽」である¹³⁾と、その序の写しを突見して明確に否定していた。蓑笠庵梨一著『奥細道菅菰抄』（安永七年・一七七八）、森長見編輯『国学忘貝』（天明三年・一七八三自序）などに清は義経を祖とする説が紹介されているように、清朝の『図書集成』渡来の話題にかこつけて俄かに語られ出した、広長の時代では義経ものの最も新しい物語の展開であった。

しかしながら、広長は松前藩の古記録、旧記から義経蝦夷渡りの証拠を見出していたのではなかった。挙例のすべては江戸や京坂といった中央で語られたことばかりであった。このような点から義経蝦夷渡りは松前や東北地方から生み出されたものではなく、中央から地方にもたらされ地方化した伝説とみるべきと、別稿で指摘しておいた¹⁴⁾。広長は樵夫や牧童にいたるまで誰でも知っている「古今和俗」とするが、もしそれが松前・蝦夷地の民間で語られていた

ことを意味するのであれば、室町時代に生まれた『御曹子島渡り』系統の物語であって、それが義経蝦夷渡り説によって多少変更が加えられたものにすぎなかったのである。

義経蝦夷渡り、義経Ⅱオキクルミ説に広長が傾倒し、「渡党」の歴史の主要な一齣に組み入れたのは、「渡党」の太守としての武田氏は義経と同じく清和源氏で、蝦夷に敬服されるべき存在としてオキクルミ説が都合よかったからである。義経蝦夷渡り伝説の政治利用であった。

五 「建国」の始祖武田信広

建国の始祖武田清敵公について、『夷酋列傳附録』は、諱を信広といい、若州小浜後瀬山城主武田大膳大夫国信の兄信賢の子で若州より来て、花沢の館主蠣崎修理季繁の先鋒として戦い、コシャマイン父子らを討ち取ったあと、太守に推されたと記している程度である。『福山秘府』や『松前志』に藩主の系譜が掲載されているが、『松前志』の「松前福山正系譜略記」には、およそ次のように「松前建国始祖」の武田信広の経歴が書かれていた。

蠣崎若狭守、童名彦太郎。永享三年（一四三一）若狭に、武田国信の兄である陸奥守信賢の子として生まれる。宝徳三年（一四五二）春に若狭を出、関東足利に来たる。その後、享徳元年（一四五二）三月奥州田名部領蠣崎に来たり、同三年八月二十八日、生駒安東太政季らとともに南部大畑を解纜して、東風に乗って松前に来たる。長禄元年（一四五七）五月の蝦夷大叛のとき、館主たちは夷賊のために数所で敗れ戦に窮まった。花館の館主蠣崎修理季繁の先鋒将となって夷酋長胡奢魔允父子や賊徒数輩を斬殺した。賊は深く始祖の驍勇絶倫の英風に服し、諸館主もしきりにその戦功を賞して、始祖をして季繁の養男に推した。建国の大礼を行い、かみのくに上国に築壘し、明徳（正しくは明応）

三年（一四九四）五月二十日六四歳で死去した。なお、季繁も若州人で、武田信繁の親族ということになっていた。¹⁵ 清巖は諡号である。

基本的には『新羅之記録』と変わらないが、『夷酋列像附録』の記述は文言的にもこの『松前志』を圧縮したようなものとなっている。こうした信広の経歴がどれだけ事実として信用できるのかはここでは問わないでおくが、蠣崎季繁の娘婿となった信広が「建国」の「始祖」となりえたのは、コシヤミンの戦いに勝ち残り、「渡党」の盟主となったからに他ならなかった。この結果、蠣崎（松前）氏の正統性は絶え間ない「夷賊」の征討によって刻印、運命づけられてしまうこととなった。以後、詳しくは述べないが、永正八年（一五一一）「東部夷乱」などが発生し、さながら「夷賊」征討の歴史であるかのように『夷酋列像附録』が記している通りである。『松前志』にも「蝦夷叛服例」という項目があり、「夷賊」とのたびたびの戦いが列挙されていた。そして「城地説」の箇所には次のように書かれている。

昔時長徳元年藩祖清敵公大に夷賊を討て此地を定め、万世の基を開き、永く日本東顧の憂を忘しこと、我日高見の国の幸のみに非ず。真に天下の大勲功ならずや。爾りしより後寛文中に至るまで夷賊起ること凡十たび、皆指^し麾^きを伝て心服せり。然則ち本藩領主の職掌至つて重しと云べし。¹⁶

すなわち、松前藩の「領主」としての「職掌」はどこにあるのか、「夷賊」を討ち、「日本東顧」の憂いをなくすることが、清敵公以来の重要な役目として認識されていることが明瞭に語られている。「我毛夷の国」と称しても、「毛夷」の人たちを「日本」の攻撃から守るのでは決してなかった。植民者による征服国家的なイメージが最も似つかわしい。

六 「夷酋」像にこめられた潜在力

寛政元年のクナシリ・メナシのアイヌの蜂起鎮圧もまた、松前藩の輝ける日本の北の門の守りとして、「蝦夷征伐」の長い歴史のなかに位置づけられていることがわかる。『夷酋列像』には作画者の蠣崎波響自身の思いが託されているのに違いないが、松前広長の『夷酋列像附録』が述べるような松前藩（蠣崎・松前氏）の中世後期以来の、「蝦夷征伐」の歴史の文脈に沿うものとして存在していたことはいうまでもない。ツキノエの事績がやくわしく述べられ、その「功」が称賛されていたのも、松前藩の「恩威」「恩顧」がアイヌ社会に深く及んで、「夷酋」たちが「心服」していることを証明してみせるためであった。

『夷酋列像』である以上、江戸時代の華夷意識にもとづく「被髪左衽」の「夷酋」性の強調こそが第一義であることを免れない。そこにはハレ着としての伝統的な中国製の蝦夷錦だけでなく、新奇なロシア風の外套や靴が描き込まれているのも特徴であった。『松前志』に「夷人服制」について述べた箇所がある。単衣・左衽を指摘したうえで、「酋豪の夷人」は「女直錦」を礼服とするとし、宝暦年中に東部夷地クスリの「酋長」トヒカラインが福山に来て領主に謁見したとき、その偉容ぶりについて、「頗る跋扈の夷人なりしが、長け高く腰の囲み太く、鬚髪明らかにして、容止甚だうるはしかりき。身には紅錦を服とし、衽には黒天鷲絨に金紗の龍を縫重ねたるを被り、進退徐々たるありさま」であって、「真に東部第一の僻もの」のように見えた¹⁷⁾と表現していた。黒い天鷲絨のような衣服を上から着ている『夷酋列像』のツキノエを思わせるような容姿といえようか。「夷酋」である以上、松前藩に協力したとしても、「夷賊」に転化して激しく反抗しうる潜在力を保持しているのであって、貧相に弱々しく描いたのでは、松前藩に対

して「叛服」を繰り返してきた「夷酋」のイメージが浮かんでこない。松前藩の始祖以来の「夷賊」との対抗の歴史を語るためにも、個性的にあるいは威風堂々と描かれ、そうした彼らが松前藩に付き従っていることが表現される必要があったように思われる。華夷意識は差別観であるが、夷狄に対する恐怖と表裏の関係にあったのである。

波響の『夷酋列像』に対して、広長の『夷酋列像附録』がこれまで述べてきたような歴史認識の枠組みや意味づけを与えており、そのような理解に立って絵画を読むことが要請されている。描く波響にはそうした制約があったとしても、むしろ絵師としての独自のこだわりがあったであろうし、描かれた絵は作成者の意図さえも超えて見る者にそれぞれの印象を与える。小論は残念ながらそうしたところにまで踏み込んで論ずる鑑識眼を持たない。

おわり」

幕府にとっては、クナシリ・メナシの戦いの背後にいてもいいかもしれないロシアの動静が一番の気掛かりであった。『夷酋列像』に描かれた物品をみれば、松前藩がロシアと関わりがあるかのように幕府を刺激しかねない図像でもあった。その点に無頓着な絵であるといえるかもしれない。『夷酋列像附録』にはロシアに関する記述はまったくみられない。松前広長がむしろ知らなかったわけではない。

『松前志』にはカラト島（カラフト）、サンタン、女直、マンヂウ（満州）、オランカイ、韃靼、ムスコビヤ国などの地理情報が記される。ムスコビヤ国の砦の地であるカムシカツテ（カムサツカ）は近いので「東夷の諸島」（今の千島列島）に伝来するものなかに阿蘭陀国の産物が入っていることもあり、広大な北狄のなかに「東北の諸島」が引き包まれるように思われるとし、熊沢次郎八（蕃山）の『大学或問』にいう「日本北狄の備へ」に対する同感を示

している。⁽¹⁸⁾ 蕃山を引くには時代環境が違いすぎている感があるが、それはともかく、『夷酋列像附録』に北方のことを何も具体的に触れないのは、幕府の高まるロシアへの危機感、警戒感に比べれば明らかに温度差がある。

広長の著作に林子平の『三国通覧図説』の誤謬を糾した『毛人井蛙談』（天明八年・一七八八）がある。そのなかでウルップ島に莫斯科未亜人^{ムスコウヒヤ}が多く居住しているのはエトロフを呑む意があるからではないかと懸念する子平に対して、「寒月孤島に於て人夷共に身を凌ぐに忍びがたきよし、然則永く住居すべきの理あるべきや、其地暴風すさまじき時は舟をつなぐに所なしとも云へり」と批判し⁽¹⁹⁾、それほど懸念するには及ばないという認識であった。幕府などの介入を受けたくない気持ちも働いていようが、対蝦夷関係に比べてロシアは後景でしかなかった。

このクナシリ・メナシの戦いを契機に日露関係が幕府の蝦夷地政策を大きく規定していき、『夷酋列像附録』に語られた漠とした北方世界に対する「北門の鎖鑰」はロシアを主対象とするものに変貌を遂げていく、その後の歴史展開があった。また、アイヌ民族に対しては、和風化政策にみられるように異民族性（「夷酋」性）を剥奪していく方向にむかう。松前広長の歴史意識に見られる松前藩の旧態依然の政治的正統性は古びて現実には使いものにならなくなっていく。まさにそのような運命にあることを松前広長、蠣崎波響ら当事者はまだ気づいていなかったに違いない。波響が描く「夷酋」像は新たな時代（近代）への転換を直前にしての、近世的な松前藩—アイヌ関係の最後を飾る象徴的な作品であったのである。

〈注〉

(1) 『新撰北海道史』第五卷史料一（北海道庁、一八三六年）一〜二頁。

- (2) 『松前町史』史料編第一卷(第一印刷出版部、一九七四年)四七頁。
- (3) 井上研一郎監修『波響とその時代』展図録(北海道立函館美術館ほか、一九九一年)の解説文による。
- (4) 『波響論集』(波響論集刊行会編集・発行、一九九一年)。
- (5) 大友喜作編『北門叢書』第二冊(国書刊行会、一九七二年)九七頁。
- (6) 同前一三七頁。
- (7) 同前一二〇頁。
- (8) 『新北海道史』第七卷史料一(新北海道史印刷出版共同企業体、一九六九年)一四頁。
- (9) 海保嶺夫編『中世蝦夷史料』(三一書房、一九八三年)八三〜八五頁。
- (10) 今泉定介編輯・校訂『新井白石全集』第三(吉川半七、一九〇六年)六八五頁。
- (11) 岩崎克己編輯『義経入夷渡満説書誌』(一九四三年、岩崎克己発行)四二〜四九頁。
- (12) 前掲『北門叢書』第二冊一六頁。
- (13) 前掲『義経入夷渡満説書誌』一〇八頁。
- (14) 拙稿「義経蝦夷渡り(北行)伝説の生成をめぐって―民衆・地方が作り出したのか―」『研究年報』三九、宮城学院女子大学付属キリスト教文化研究所、二〇〇六年)。
- (15) 前掲『北門叢書』第二冊一〇四〜一〇五頁。
- (16) 同前一三七頁。
- (17) 同前一一三〜一四頁。
- (18) 同前一二〇〜一二二頁。
- (19) 『毛人井蛙談』は『世界』第九〇号六九〜七三頁、同九一号六四〜六九頁(興国社、明治四四年・一九一一)に分載されている。引用箇所は九一号六四頁。